

社会心理学研究 第7巻第1号
1992年, 1~7

顔と音声からのごまかしの判別¹

山口真美² (お茶の水女子大学)

Detecting deception from face and voice

Masami YAMAGUCHI (*The Doctoral Course in Human Culture, Ochanomizu University*)

In every day life, when we feel being deceived by someone, we pay attention to his/her facial expression and tone of voice. Three experiments were carried out by using undergraduate students. The purpose were (1) whether students can detect deceptive facial expressions from true ones, (2) whether difference may be found between men and women in detecting the deceptive facial expressions and in making disguise of deceptive facial expressions, (3) whether the results will be different or not in the following three conditions, 1) facial expression plus voice, 2) facial expression only, 3) voice only. In this experiment, "deception" was made by asking subjects to conceal negative feeling and falsely claimed to be enjoying themselves even when they watched the aversive films. Results showed that, (a) students could detect deceptive facial expressions, (b) there was no difference between men and women in detecting deceptive facial expressions, but there was difference between men and women in making disguise of deceptive facial expressions, and (c) no differences were found among the three conditions.

Key words : facial expression, deception, negative feeling, detection, tone of voice,
キーワード：表情・ごまかし・否定的感情・漏洩・声のトーン

問 題

ヒトの情報の伝達には伝えようとする情報と隠そうとする情報の2つの情報が混在することがある。特に、身体や表情から伝達される言語以外の情報—非言語情報—では、この混在は著しいと思われる。それは、言語が伝えようという意図があつて初めて伝達される性質のものであるのに対して、非言語情報はこのような意図を介さずに伝達される性質を持つからであると思われる。話し手が意図していないにもかかわらず非言語情報を生成しているという事実を裏付けるかのように、ヒトは言語情報を受け取ると同時に相手のしぐさや表情にも注意を払っているのである。それによって、ヒトは相手からなんらかの言語外の隠された情報を読み取ろうとしているのかもしれない。

ヒトが意図しないにもかかわらず非言語情報を生成しているという点についてはいくつかの知見がある。古くは Darwin (1872) が『心の特定の状態に連合された筋肉は意志によって部分的に抑制されるが、意志によるコントロールの少ない筋肉は、他の活動が抑制される場合でも活動することがあり、表現された動作として認識される原因となる。』と、隠そうとしても隠すことのできない情報があるということを示唆している。

このような隠そうとしている情報の漏洩の研究は、Ekman (1969, 1974) によって具体的に身体の中の部分

の動作がコントロールされ易いかについての「ごまかしの判別実験」が行われてきた。Ekman (1969) は非言語情報がどのように抑え偽られ、情報が偽りであるという証拠として扱われるかを説明するために、身体を解剖学的に手・顔・足の要素に分解し、それらの送信能力の違いを仮定した。これによると、身体各部位の送信能力は、平均伝達時間・再現できる弁別可能なパターン数・可視性の3つの項目によって決定されるという。またこれに、外的フィードバック（非言語行動が他者の評価や興味の対象であるという情報を伝えるコメント・模倣・視線の方向などの他者の行動を指す）と内的フィードバック（自分がしていることへの気づき、自動的な行動の連続を思い出し繰り返し演じることでできること）の高低を加えて考えると、送信能力の高い身体部位は顔・手・足の順になるという。Ekman (1969) によると、ごまかしの

-
- 1) 本研究は日本心理学会第54回大会でポスター発表されました。
 - 2) 本研究を進めるにあたって有益な助言を頂いたお茶の水女子大学春日喬教授、論文作成に際してご助言を頂いたお茶の水女子大学内田伸子助教授に記して感謝いたします。

手掛かりの漏洩はこの送信能力の高さに反比例するという。つまり、ヒトはごまかしをする際に、顔の表情を統制することにより多くの注意を払うので、統制されることの少ない手・足から隠された情報が漏洩され、顔よりも手、手よりも足の順にごまかしの漏洩は高いというのである。

また Ekman (1969) は、ごまかしの漏洩には leakage (ごまかしの漏洩) と deception clues (ごまかしの手掛かり) の 2 種類があると指摘している。leakage (ごまかしの漏洩) とは、非言語行動が他者に対して隠した情報を漏洩することであり、deception clues (ごまかしの手掛かり) とは、非言語行動が何がごまかされているかは示さずにごまかしが起こっているということだけを漏洩することであるという。この仮説に従って、Ekman 等 (1974) は、不快な映画を見た被験者が否定的な感情を隠して快適に振る舞っている面接場面を撮ったビデオを顔と身体に分離して別の被験者に観察させたところ、顔よりも身体の方が leakage (ごまかしの漏洩) も deception clues (ごまかしの手掛かり) もともに高く、判別され易いということを見いだしている。Ekman を支持する研究はその後もなされている (Littlepage, G.E., & Pineault, M.A., 1979)。しかしこれに対しては異論もあり、Feldman (1976) の教師役の学生がサクラである成績の悪い生徒役の学生に否定的な感情を隠して肯定的評価を与えている場面を顔と身体に分離して観察させる実験では、顔と手の両方から leakage (ごまかしの漏洩) と deception clues (ごまかしの手掛かり) が見られたという。表情をごまかしの一つの指標として見た場合に、ごまかしと真の表出の間の変化をとらえられなかった研究もある (Kraut, 1978; Kraut & Poe, 1980; Mehrabian, 1971; Riggio & Friedman, 1983)。これらの研究は、personality や social skill からごまかしを漏洩する個体差を特定したり (Riggio & Friedman, 1983)、俳優を使って非言語行動を操作する実験を行ったり (Kraut, 1978)、税関の検閲官と素人の被験者を比べてごまかしを見破る側の経験要因を特定したりしている (Kraut & Poe, 1980) が、いずれも姿勢の変化・手の動き・足の動きなどの身体動作と同じ下位レベルの要素のひとつとして微笑・視線の動きをごまかしの指標としている。

さらに、ごまかしの手掛かりとしての身体からの表出を大まかに分けたものからごまかしを判別させる実験も行われ、凝視の多さ (Burns & Kintz, 1976)、話の速度 (Ekman, 1976)、瞳孔の大きさ (Janisse & Bradley, 1980)、手の動きや足の動き (MacClintock & Hunt, 1975) などがごまかしの漏洩と関係していると報告されている。これらの研究の特徴は、どれも身体と表情を二つに分けて、物理的に大きい身体に従属する要素の一つとして表情を捕えていることである。これらの流れを汲んだ最近

の Ekman (1988) の研究は、表情を中心として捕え、表情を細かい要素に分けて捕える顔面分類法のテクニックを使って、ごまかしの表情を判別する実験を行った。その結果、表情におけるごまかしの手掛かりは身体部位での変化に比べて微細なものに止まるが、ごまかしの表情を真の表情と判別することは、顔面分類法の訓練を受けた表情判別者では可能であるとしている。Ekman はこの研究の中で、身体に従属する要素のひとつとして表情を捕えたのではなく、表情を大きな独立要素の一つとして考えて、それを各筋肉の働きごとに細かく分けて研究する手続きを取ったのである。表情を一つの独立要素として捕えたことは大きな進歩であるが、この細かい分析を体得した者にしかごまかしの表情を判別できないという点には疑問が残る。

我々が日常生活の中で他人との人間関係をつくる上で、言語情報の他に様々な非言語情報を読み取っているのは、ごく普通のことであり、とりわけ表情に対する感受性は高いと思われる。このような表情に対する感受性は言語を持たない段階から既に存在することが知られている。ヒトの顔への注目は、「共鳴動作」(co-action) とも呼ばれ、生後12日から21日目の乳児が実験者の舌を出したり口を大きく開けたりする行為に注目して、同じように舌を突き出したり口を開けたりしたという報告 (Melzoff & Moor, 1977) にも示されるように、非常に初期の段階から存在するのである。共鳴的同調行動とも呼ばれる、このような表情を含めた非言語情報への先天的とも思える興味や注目が、相手に何かを伝達しようという意志の下敷きになっているとも考えられるのではないだろうか。このようなことから考えられるように、日常の生活でも、ごまかしを見破るときに相手の表情に注目するということは極めて一般的であり、ごまかしと真の表情の区別は、訓練を受けた専門家でもなくとも可能であると考えられる。本研究では、ごまかしと真の表情と思われる表情を集め、学生を対象にして表情の真偽 (ごまかしか真の表情か) を判別させる実験を行った。また、本研究では、表情自体を細かく細分化することなく、顔全体として提示して実験を行った。

さらに本研究では、ごまかしの表情表出・表情判別における男女差についても言及する。ごまかしの表情表出の男女差については、Bella (1985) によって、女性によるごまかしは男性によるごまかしよりも漏洩の度合いが高いという結果が表されている。表情判別についての男女差は、顔の認識の有意性を持つ大脳半球の右半球に依存する度合いの違いと、場依存性・場独立性の認知スタイルにおける違いから、女性の有意性が説明されている (Fridlund, 1987)。

方 法

実 験 1

実験計画 被験者の快・不快スライドを見ている場面をビデオに撮り、不快スライドを快適なようすで見ているごまかしの表情を有意に判別しうるかどうかを検討した。更に、表情を表出する側（実験協力者）の男女と表情を判別する側（被験者）の男女の2×2要因で、ごまかしの表情の表出と判別に男女による違いがあるか調べた。

〈表情刺激の製作方法〉

実験協力者 大学生 23名（男子10名・女子13名）

年齢 21±3歳

刺激材料 快・不快のスライドを実験材料とした。快スライドは風景写真2枚（竹林の風景と紅葉風景）と子供の写真1枚、不快スライドは皮膚病診療図説からの写真3枚（皮膚病の乳児・老婦人の上半身ケロイド状態・皮膚癌末期の子供の顔のアップ）を刺激として提示した。スライドの提示順は、不快の刺激が快の刺激を圧倒する順序効果を防ぐために、快・不快の順とあらかじめ決めておいた（Ekan, 1974）。

手続き Ekman (1974) に従って、ごまかしの表情を作る実験を行った。被験者にどんなスライドが提示されても快なものを見ているかのように振る舞うように質問に答え、表情もそれに合わせるように教示して、快・不快のスライドを提示し、テープから流れるスライドに関する質問に答えさせる。テープから流れる質問項目とそれに対する答えも模範回答としてあらかじめ設定しておいたが、言葉使いや語尾は普段の自分の話しかたに合わせて不自然にならないように変えてもよいとした。実験に入る前に模範回答を覚えているか確かめるために一度実際に質問に答える回答の訓練を行ってから実験に臨んでもらった。回答を暗記しているということを確認してから実験を行った。

教示文：『この実験は、実際におこっている感情とは別の感情を表出できるかというあなたの表情の表出能力を調べる実験です。これから実験室に入って椅子に座り中央のスクリーンに映し出される7種類のスライドを見てもらいます。実験中はスライドから目を離さないでください。それぞれのスライドを見たところでスピーカーから質問が流れてきます。ビデオカメラの方を見ながらシナリオ通りに答えてください。答えるときの表情は、ビデオを見ている人に良い印象を与えるようにいつでも快適な様子で答えてください。答えているときのあなたの表情をビデオに撮らせてもらいます。合計7回同じ質問に同じ答えを答えてもらうこととなります。』

質問項目とそれに対する模範回答例；

質問1『あなたは今どんなスライドを見ているのですか？』

回答 『すてきなスライドを見えています。』

質問2『このスライドを見てどう思いますか？』

回答 『とても良い気分です。』

質問3『あなたは友達にもこのスライドを見せたいと思いますか？』

回答 『すてきなスライドなのでぜひ見せたいです。』

実験終了後、一番気に入ったスライドと一番不快だったスライドを選んでもらう。

ビデオ編集方法 実験協力者ごとに、内観をもとにして、一番不快だったスライドの表情を不快スライドの表情（ごまかしの表情）として1枚、一番気に入ったスライドの表情を快表情として1枚選んだ。更に、一番気に入ったスライドが風景写真であった場合は子供の写真を、一番気に入ったスライドが子供の写真であった場合は風景写真の気に入った方をもう一枚快表情として追加した。スライドを見てテープから流れる質問に答えている時の顔のアップの画面を取り出して、被験者ごとにこの3つの3枚の表情がランダムに並ぶように編集した。3つの質問に答えているのかかった時間は約30秒であった。このことから、表情1枚提示するのに約30秒、3枚で約1分30秒の時間を要する。これを23人の実験協力者全員に関して行い、合計69枚の表情を取り出した。内観をもとにして取り出した、刺激スライドの分布は以下の通りである。快刺激では、子供の写真23人分（その中で子供の写真を一番気に入ったとした者は9人）、風景写真1（竹林の写真）7人分（その中でこの写真を一番気に入ったとした者は7人）、風景写真2（紅葉の景色）16人分（その中でこの写真を一番気に入ったとした者は7人）を使用した。不快刺激では、不快1（子供の皮膚病の写真）5人分、不快2（老婦人の上半身ケロイド状態の写真）11人分、不快3（皮膚癌末期の子供の顔のアップの写真）7人分を使用した。

〈表情別実験〉

被験者 大学生 60名（男子30名、女子30名）

年齢21±3歳（実験協力者とは面識が無い）

実験手続き 教示を与えてから刺激材料を被験者に提示し、ビデオに録画された表情と音声情報から、表情の快（快な刺激を見た表情）・不快（不快な刺激を見た表情）を判別させた。教示は以下の通りである。『スライドを見て質問に答えている23人の表情のビデオを見てもらいます。それぞれの人物は質問に対してみな同じように肯定的な様子で答えています、その中には嘘をついているものがあります。本当は不快なスライドを見ているのにもかかわらず快適な様子で質問に答えていることがあります。ビデオを見て、その人物の表情が本当のことを言

っている表情か、嘘を言っている表情か、つまり本当に快適なスライドを見ているのか、本当は不快なスライドを見ているのか、判断して下さい。』それぞれの実験協力者の表情のビデオを、2回繰り返して見てから、各実験協力者ごとに3枚の表情についてそれぞれ本当に快なスライドを見ている表情か不快なスライドを見ているのに快なスライドを見ているかのように振る舞っている表情かの、表情の判別を行ってもらった。

結 果

不快スライドの表情の判別の結果を取り上げて分析した。不快スライドの表情を偽（本当に快のスライドを見ている表情ではなく不快な感情を隠している表情である）と判断した回答を正答とした。快スライドを見ている表情は、本当（本当に快なスライドを見ている表情）を正答とした。ごまかしの表情の判別率は全体では59.6%で、0.5%水準で有意に判別されることがわかった ($x^2=47.22$, $df=1$)。これから、本実験の条件では、一般の大学生によってごまかしの表情を判別することが可能であるという結果が得られた。ごまかしの表情を判別させるための刺激として扱った快スライドにおける表情の判別率は、50.3%であった。なお、スライド刺激別の表情判別率は、快スライドでは、“竹林” 63.1%、“紅葉風景” 46.1%、“子供” 49.6%で、不快スライドでは、“皮膚病の子供” 47.3%、“老婦人” 54.4%、“皮膚癌の子供” 76.7%であった。

ごまかしの表情判別が正しくできた割合を男女別に Fig. 1に示す。Fig.1に見られるように、表情を表出する側(実

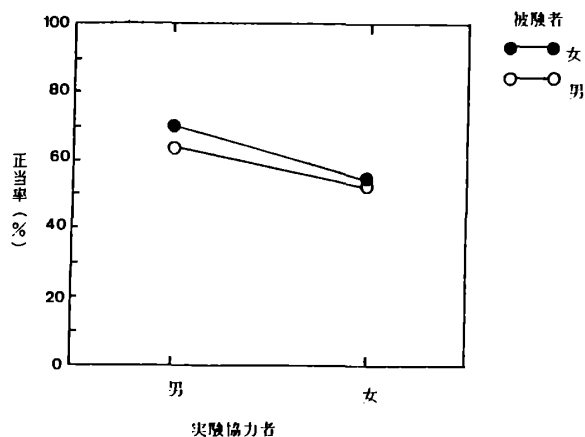


Fig.1.ごまかしの表情判別における性差
(表情を表出する側と表情を判別する側の
男女のごまかしの表情判別の正解率の平均)
実験協力者:表情を表出する側, 被験者:表情を判別する側

験協力者)の男女別に正答率を比べると、男子67.1%、女子53.9%と、男子の実験協力者の方が表情の判別の正答率が高く、表情を判別する側(被験者)の男女別に正

答率を比べると、男子58.8%、女子62.3%と、女子の被験者の方が表情判別の正答率が高かった。 x^2 検定を行ったところ、表情を表出する側(実験協力者)における男女において分布に有意な偏りがあり、その比率から男女差があることが検出された ($x^2=23.9$, $p<.05$)。

実験1では、ごまかしの表情判別の実験の結果は、表情を表出している実験協力者の回答を答えている音声をも含んだビデオテープに対する判別から得られたものである。これから、ごまかしの判別は本当に表情だけから行っているのか、音声もごまかしの判別になんらかの働きをしているのではないか、という疑問が生じてくる。これを解決するために、音声をカットして表情だけを流したビデオテープ、音声だけを流したカセットテープ、についても実験1と同様な判別実験を行い、実験1から得られた結果との比較を行った。

実 験 2

実験計画 音声をカットして表情だけを提示してごまかしの判別させる実験と、音声だけを提示してごまかしの判別させる実験を行い、実験1の表情と音声情報とともに提示してごまかしの判別させた結果(女子の結果)と比較した。

被験者 女子大生 各20名

年齢 21 ± 3 歳(実験協力者とは面識が無い)

手続き 表情だけを提示する条件では、実験1で編集したビデオテープを、音声をオフにして視覚情報だけを流して行った。実験1と同様の手続きで、このビデオテープを見て、表情だけから、表情の真偽(本当に快なスライドを見ているのかどうか)を判別させた。音声提示条件では、実験1のビデオテープの音声部分を録音したテープを作った。このテープを実験1と同様の手続きで聞かせて、表情無しの音声情報だけから真偽(本当に快なスライドを見ているのかどうか)を判別させた。

結 果

実験1と、実験2の表情提示条件と音声提示条件でのごまかしの判別の正答率を Fig. 2に示した。表情提示条件でのごまかしの判別率は60.0%と高く、0.5%水準で有意に判別された。音声提示条件でのごまかしの判別率も60.0%と高く、これも0.5%水準で有意に判別された($x^2=8.65$, $p<.05$)。ごまかしの表情を判別するために提示された快スライドでの表情の判別率は、表情提示条件では50.3%、音声提示条件では49.8%であった。

次にごまかしの判別の刺激提示側の性による違いをみる。表情提示条件では男子が50.0%、女子が70.0%であった。音声提示条件では、男子が58.0%、女子が61.0%であった。表情提示条件でのみ、刺激提示側の男女の分布には偏りがあり、その比率から男女差があることが検

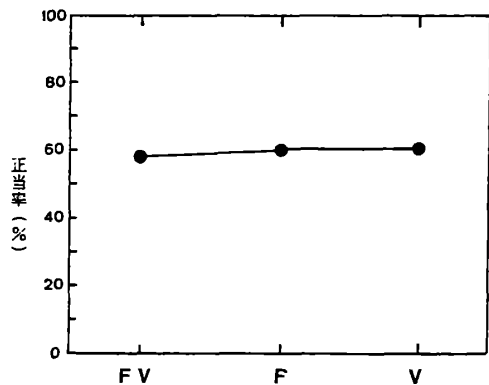


Fig. 2. ごまかしの表情判別における実験条件の影響
(各実験条件でのごまかしの表情判別の正解率の平均)
FV: 表情と音声提示条件, F: 表情提示条件, V: 音声提示条件

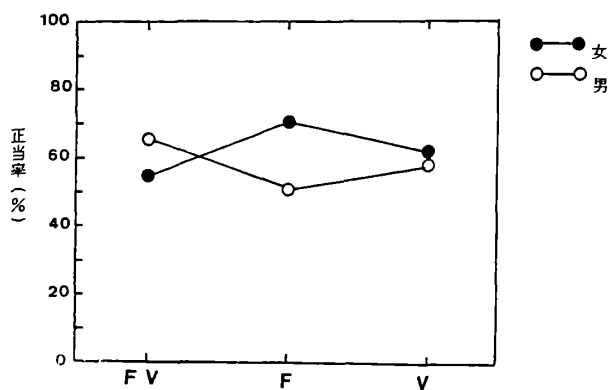


Fig. 3. ごまかしの判別の条件別・刺激側の男女別の正解率
FV: 表情と音声提示条件, F: 表情提示条件, V: 音声提示条件

出された ($x^2=8.65$, $p < .05$)。

また実験1の結果と比較するため、つまり実験1の表情と音声両方の提示条件での判別率と、実験2の表情提示条件、音声提示条件の判別率とを比較するために x^2 検定を行った。各条件での女性被験者のごまかしの表情の判別の正答の分布の偏りを比較した。その結果、実験1の表情・音声提示条件と表情提示条件と音声提示条件の正答の分布の間には有意な偏りは見られなかった ($x^2=0.19$, $df=2$, $p > .1$)。本実験条件では、表情だけを与えても、音声情報だけを与えても、表情と音声情報の両方を与えても、ごまかしの判別には差はなかった。これから、本実験条件では、表情も音声も単独でごまかしを判別させる情報量を持っているという結果となった。更に、当初考えたように、ごまかしの判別には表情だけが

重要な働きをしているということはなく、音声も表情も同じごまかしの判別率を持つという結果が示された。

総合的考察

以上3つの実験の結果から、第一に、実験1のごまかしの表情判別実験の正答率が59.6%と偶然よりも有意に高いことから ($x^2=47.22$, $df=1$, $p < .05$)、本実験条件では、学生である被験者をごまかしの表情を見破ることが可能であることがわかった。第二に、実験1のごまかしの男女の表情判別の結果を比較した結果、本実験条件では、表情を判別する側の男女別の正答率は男子58.8%、女子62.3%と正答の分布に差は見られないものの ($x^2=0.69$, $p < .1$)、表情を表出する側の男女別の正答率は男子67.1%、女子53.9%と正答の分布に偏りがあり ($x^2=23.9$, $p < .05$)、その比率から刺激提示側に男女差があることが判明した。実験2のごまかしを音声だけから判別する条件での刺激提示側の男女別正答率は、男子58.0%、女子61.0%と差は見られず ($x^2=0.03$, $p > .1$)、表情提示条件での刺激提示側には、男子50.0%、女子70.0%と正答の分布に偏りがあり ($x^2=8.65$, $p < .05$)、男女差が見られた。しかし、実験1の表情音声提示条件では男子が判別されやすく、実験2の表情提示条件では女子が判別されやすいという矛盾した結果となった。第三に、本実験の条件では、実験2の表情提示条件・音声提示条件のごまかしの表情の判別の正答率はそれぞれ60.0%で、偶然よりも有意に高かった ($x^2=8.65$, $p < .05$)。このことから、表情だけからでも、音声だけからでもごまかしを判別することが可能であることが判明した。更に、ごまかしの判別には、実験1の表情と音声提示条件と実験2の音声提示条件、表情提示条件の間に正答の分布の偏りは無く ($x^2=0.19$, $df=2$, $p > .1$)、音声も表情と同様に重要な働きをしていることがわかった。以上が本実験から得られた結果である。

第一のごまかしの表情の判別可能性については、表情判別の被験者の内観から、自分の回答に自信を持っていると答えた者は、実験1・実験2を合わせても5人と少なく、被験者全体の8%に過ぎなかった。反対に、自分の回答に全く自信が無いと答えた者は実験1では40人と被験者全体の67%を占め、実験2では被験者全員が自分の答えに自信が無いと答えていた。このことから、ごまかしの判別率は高くとも、ごまかしの表情を言い当てることができたという成功感は伴っていないこともわかった。このことから、ごまかしの表情はEkmanの言うとおりはっきりと判別できない微細な変化ではあるものの、プロの判定者でしか判別できないというわけではなく、当初に予測したように、一般的に判別できるものであるという仮説を支持している。実際、日常生活では、誰もが表情判別者として行動しているのである。

また、性差は、ごまかしの表出側においてのみ存在し、ごまかしの判別には性差は見られなかった。しかし、ごまかしの表出の性差は、表情と音声情報提示条件では男性の方が有意に判別され易く、表情提示条件では女性が有意に判別され易いという矛盾した結果であった。Bella (1985) による研究では、女性によるごまかしは男性によるごまかしよりも漏洩の度合いが高く、また異性へのごまかしは同性へのごまかしよりもごまかしの漏洩の度合いが高いという結果が出されている。しかし、本実験条件では、ごまかしの表情を作った実験協力者達は、ヒトが目の前にいることを想定してテープに対して答えているのであり、実際にヒトを目の前にしてごまかしているわけではない。従って、ごまかしの性差をより細かく調べるには、実際にヒトを目の前にした、別の実験状況を考える必要があると思われる。

相手のごまかしの表情を見破るのに、本実験条件では、音声も表情と同様に重要な働きをしているということがわかった。具体的に音声のどの部分のごまかしの漏洩していたかについては本実験では明らかにしていないが、この結果は、Ekman (1976) のごまかしの状況では会話のピッチが変わるという結果を支持するものである。

表情判別の被験者は、判別率は高くとも、当てたという実感はなかった。これは、表情からの情報は僅かで解りにくいということはあてはまるが、それでも正解するというヒトの非言語情報処理能力の高さを暗示させるものといえよう。

本実験では、あらかじめ偽りがどのような性質のものであるか（不快な情動を隠して快適なようすでいるというごまかし）を被験者に明示した形でごまかしの判別実験を行った。ごまかしの状況を知っているということがごまかしの判別に有利であるのは当然である。日常生活では、相手の嘘を見抜こうとする状況は、このように、相手がどのようなことについて嘘をついているかあらかじめ知っていることが多いので、あえてこのような状況の下でごまかしの判別を行ったが、相手の状況を知っているということが、どの程度ごまかしの判別に有利に働くのか、これから知るべき課題であると思われる。それには、ごまかしの内容を被験者にあらかじめ告げずに判断を行うような実験も必要であろう。

本実験で、被験者がごまかしを見破るために注目した表情の部位として挙げられたものの80%が、“目の周辺” “目付き” “まばたき” などの顔の上部にあたるもので、“口の周り” などの顔の下部に注目した者は30%ほどであった。これも、“不快なスライドを見ている” という被験者が置かれた状況から推測してのことであろう。このことから、実験協力者の状況を知らなければ、このような表情の部位に注目することもなく、被験者の表情の正答率も低かったであろうことが推測される。

本実験での根本的な問題は、実験で得られた不快スライドでの表情が、本当に不快な感情を抑えて快適であるかのように振る舞ったごまかしの表情であるかということである。スライドを見た後に取った被験者の内観によると、不快スライドに関しては、“見るのがつらい”・“目をそむけたい” といった感想を洩らした者が10人、言葉に詰まったり、顔がこわばったり、自分のようすに微妙な変化を感じた者7人、気持ちが悪いと感じた者7人、ショックを受けた者2人、怖いと感じた者1人、と被験者全員が何らかの不快な感情を感じていたことが判明した。本実験での不快刺激である不快スライドは、被験者の内観から不快な情動を喚起させるものであったということを確認した。これに対して快スライドに対する感想は、子供のスライドにマイナスの感情を抱いた者が2人、風景スライドのうち竹林のスライドにマイナスの感情を抱いた者が2人存在し、快スライドが被験者全員に同様な快感情を喚起することができたかどうかは疑問である。これに加えて、ごまかしを行ったかどうか（不快であるにもかかわらず快適であるかのようにふるまったか）についても実験後被験者から簡単な確認を取った。その結果、不快スライドでは、2人の被験者が完全に演技できたと報告し、残りの被験者はできる限り演技したという報告が得られた。不快スライドで、ごまかしがどの程度実行できたかについての程度の認識は、個人による差が大きいと思われるが、どの程度ごまかしを実行することができたかについてのより一層厳密な検討が必要であると思われる。

本実験のような限定された状況でのごまかしは、一般の状況から考えると、特異な面も多いと考えられる。ごまかしの微細な漏洩を発見するには、ごまかしの情報を発する者と受け取る者が同じ場にいることが重要な働きをしていると考えられる。特に、ごまかしの『読み取り』『読み取られ』の男女差を考える場合、異性が同性が同じ場にいることによる隠そうとする動機づけレベルによる心理的な違いが重要なポイントとなろう。しかし、このように表情を表出する側と表情を判別する側が同じ場にいるごまかしの実験は少ない。本実験でも、実験状況を厳密にするために、テープから聞こえる女性の声に対して応答し、その時の表情をビデオに撮って判別するというような日常生活から遠い状況設定となった。

更に、日常生活の中ではごまかしが自分の自我像の形成や役割期待にかかわっていることも多く、それを維持しようという意志も強く、単なる実験状況よりも情報を偽り隠そうという動機づけのレベルが高いと考えられる。

このように、人工的な実験状況が与える影響は強いと考えられる。これらのことを考慮に入れ、ごまかしを判別しうる要因や状況についてより詳細に、より日常生活に近い状況で実験を行うことが今後の課題である。

引用文献

- Bella, M. D., Julie, I. S., & G. Daniel L., 1985, Telling Ingratiating Lies: Effects of target sex and target attractiveness on verbal and nonverbal deceptive success. *Journal of Personality and Social Psychology*, 48, 1191-1203.
- Burns, J.A., & Kintz, B.L., 1976, Eye contact while lying during an interview. *Bulletin of the Psychonomic Society*, 7, 87-89.
- Darwin, C., 1979, *The Expression of Emotions in Man and Animals*. London; Julian Friedman Publishers.
- Ekman, P., & Friesen, W.V., 1969, Nonverbal leakage and clues to deception. *Psychiatry*, 32, 88-106.
- Ekman, P., & Friesen, W.V., 1974, Detecting deception from body or face. *Journal of Personality and Social Psychology*, 29, 288-298.
- Ekman, P., & Friesen, W.V., & Scherer, K.R., 1976, Body movement and voice pitch in deceptive interaction. *Semiotica*, 16, 23-27.
- Ekman, P., Friesen, W.V., & O'Sullivan, M., 1988, Smile When lying. *Journal of Personality and Social Psychology*, 54, 414-420
- Feldman, R.S., 1976, Nonverbal disclosure of teacher deception and interpersonal affect. *Journal of Educational Psychology*, 68, 807-816.
- Fridlund, A.J., Ekman, P. & Oster, H., 1987, Facial expression of emotion. In A. W. Siegman & S. Feldstein (Eds.), *Nonverbal behavior and communication*. Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.
- Kraut, R.E., 1978, Verbal and nonverbal cues in perception of lying, *Journal of Personality and Social Psychology*, 36, 380-391.
- Kraut, R.E., & Poe, D., 1980, On the line: The deception judgments of customs inspectors and laymen. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 784-798.
- McClintock, C.C., & Hunt, R.G., 1975, Nonverbal indicators of affect and deception in an interview setting. *Journal of Applied Social Psychology*, 5, 54-67.
- Mehrabian A., 1971, Nonverbal Betrayal of Feeling. *Journal of Experimental Research in Personality*, 5, 64-73.
- Meltzoff, A.N., & Moore, M.K., 1977, Imitation of facial and manual gestures by human neonates. *Science*, 198, 75-78.
- Riggio, R.E., & Friedman, H.S., 1983, Individual differences and cues to deception. *Journal of Personality and Social Psychology*, 45, 899-915. (1990年6月14日受稿, 1990年10月5日掲載決定)